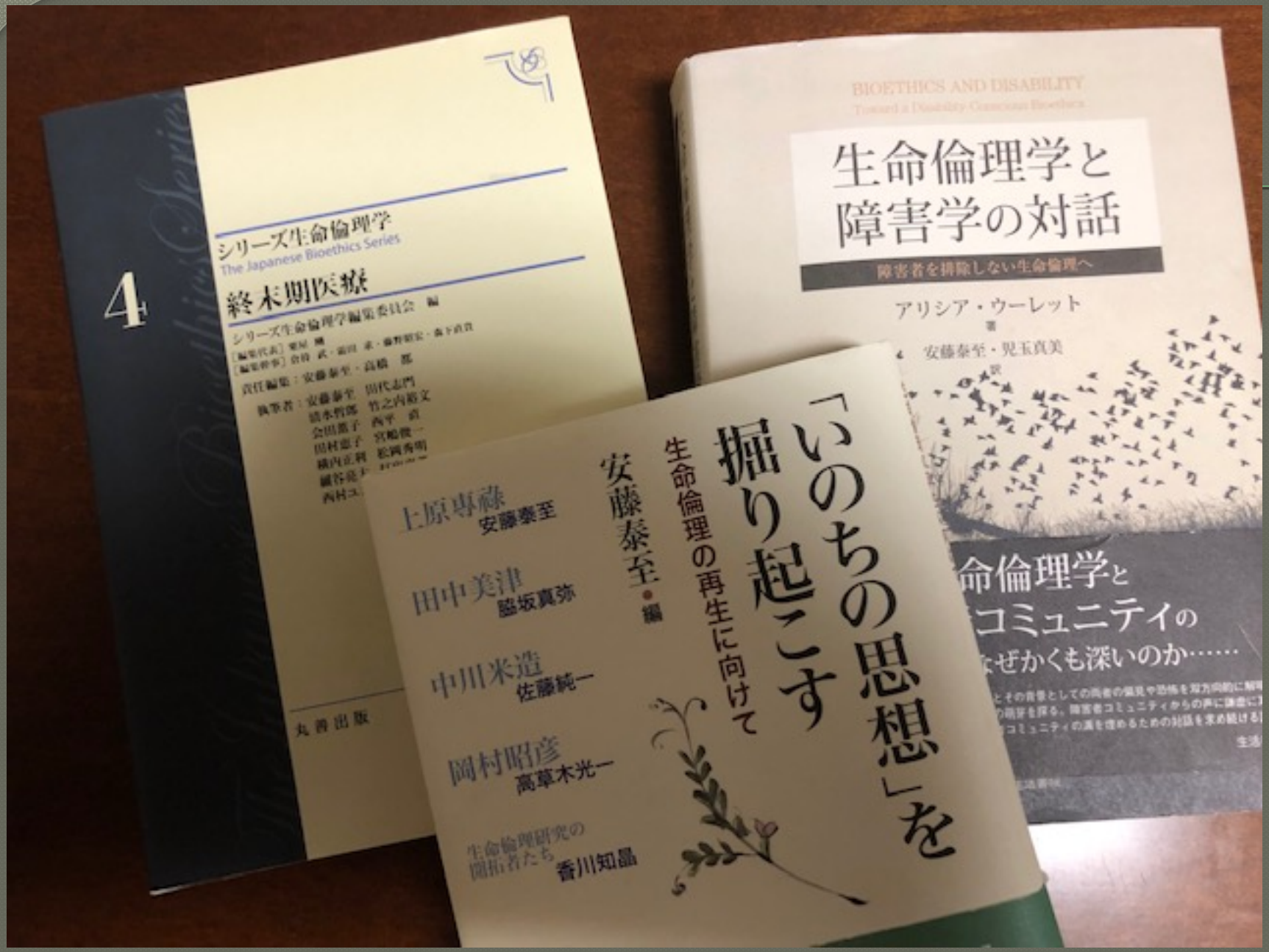
スピリチュアルな問いとしての生命倫理

－宗教と医療のはざまで－

安藤　泰至
（鳥取大学医学部）

2019.9.13 日本心理学会シンポジウム
「宗教心理学的研究の展開（16)－宗教と生命倫理－」


4
シリーズ生命倫理学
The Japanese Bioethics Series
終末期医療
丸善出版
BIOETHICS AND DISABILITY
生命倫理学と
障害学の対話
障害者を排除しない生命倫理へ
アリシア・ウーレット
著
安藤泰至・児玉真美
訳
「いのちの思想」を
掘り起こす
生命倫理の再生に向けて
安藤泰至・編
上原専祿 安藤泰至
田中美津 藤坂真弥
中川米造 佐藤純一
岡村昭彦 高草木光一
生命倫理研究の
開拓者たち 香川知晶

私（安藤）の専門分野

宗教学　　生命倫理　　死生学

but

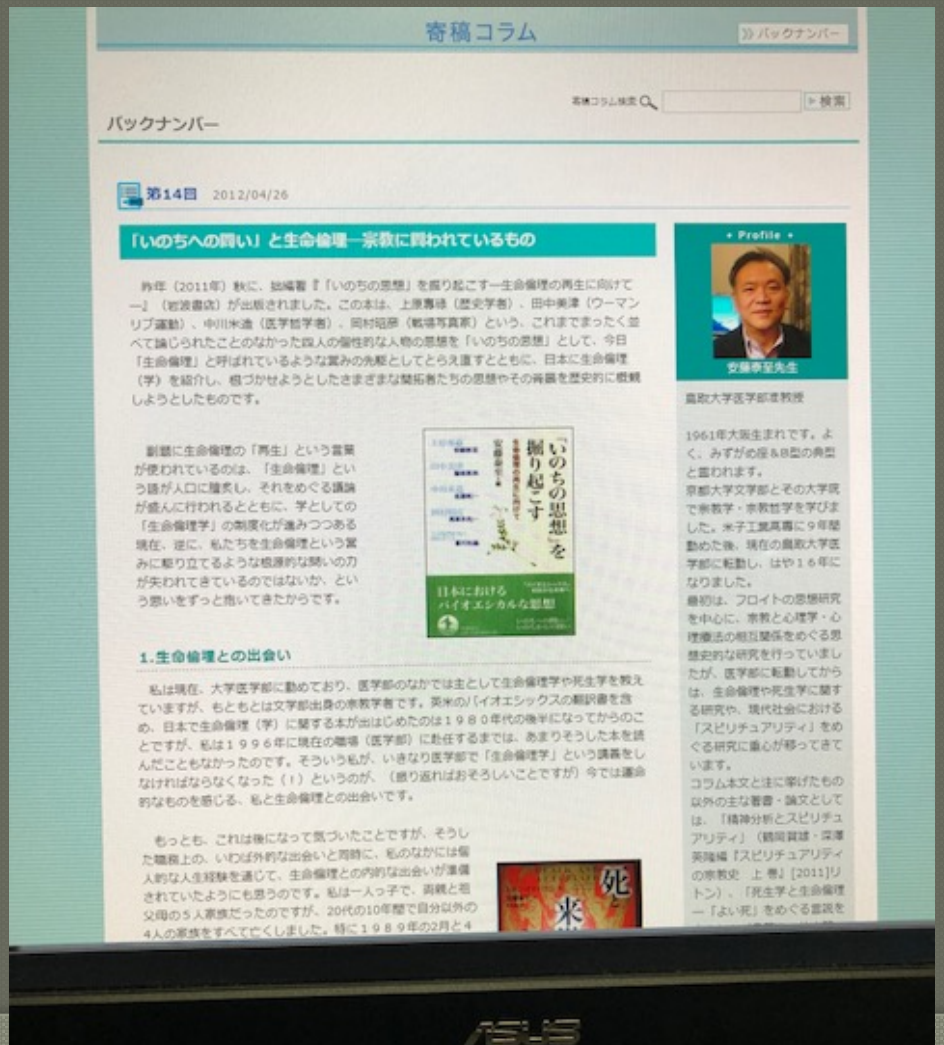
「生命倫理学」とは絶対に書かない

「生命倫理学者」と紹介されたときには、それを否定

宗教情報センターコラム　2012.4.26

安藤泰至「「いのちへの問い」と生命倫理 －宗教に問われているもの－」

.



寄稿コラム

» バックナンバー

寄稿コラム検索　▶検索

バックナンバー

第14回　2012/04/26

「いのちへの問い」と生命倫理―宗教に問われているもの

昨年（2011年）秋に、拙編著『「いのちの思想」を掘り起こす―生命倫理の再生に向けて―』（岩波書店）が出版されました。この本は、上原專祿（歴史学者）、田中美津（ウーマンリブ運動）、中川米造（医学哲学者）、岡村昭彦（戦場写真家）という、これまでまったく並べて論じられたことのなかった四人の個性的な人物の思想を「いのちの思想」として、今日「生命倫理」と呼ばれているような営みの先駆としてとらえ直すとともに、日本に生命倫理（学）を紹介し、根づかせようとしたさまざまな開拓者たちの思想やその背景を歴史的に概観しようとしたものです。

創造に生命倫理の「再生」という言葉が使われているのは、「生命倫理」という語が人口に膾炙し、それをめぐる議論が盛んに行われるとともに、学としての「生命倫理学」の制度化が進みつつある現在、逆に、私たちを生命倫理という営みに駆り立てるような根源的な問いの力が失われてきているのではないか、という思いをずっと抱いてきたからです。

1.生命倫理との出会い

私は現在、大学医学部に勤めており、医学部のなかでは主として生命倫理学や死生学を教えていますが、もともとは文学部出身の宗教学者です。英米のバイオエシックスの翻訳書を含め、日本で生命倫理（学）に関する本が出はじめたのは１９８０年代の後半になってからのことですが、私は１９９６年に現在の職場（医学部）に赴任するまでは、あまりそうした本を読んだこともなかったのです。そういう私が、いきなり医学部で「生命倫理学」という講義をしなければならなくなった（！）というのが、（思い返ればおそろしいことですが）今では運命的なものを感じる、私と生命倫理との出会いです。

もっとも、これは後になって気づいたことですが、そうした職務上の、いわば外的な出会いと同時に、私のなかには個人的な人生経験を通じて、生命倫理との内的な出会いが準備されていたようにも思うのです。私は一人っ子で、両親と祖父母の５人家族だったのですが、20代の10年間で自分以外の４人の家族をすべてなくしました。特に１９８９年の2月と４

＊Profile＊

安藤泰至先生

鳥取大学医学部准教授

1961年大阪生まれです。よく、みずがめ座＆B型の典型と言われます。
京都大学文学部とその大学院で宗教学・宗教哲学を学びました。米子工業高専に９年間勤めた後、現在の鳥取大学医学部に転勤し、はや１６年になりました。
最初は、フロイトの思想研究を中心に、宗教と心理療法の相互関係をめぐる思想史的な研究を行っていましたが、医学部に転勤してからは、生命倫理や死生学に関する研究や、現代社会における「スピリチュアリティ」をめぐる研究に重心が移ってきています。
コラム本文と注に挙げたもの以外の主な著書・論文としては、『精神分析とスピリチュアリティ』（鶴岡賀雄・深澤英隆編『スピリチュアリティの宗教史　上巻』[2011]リトン）、「死生学と生命倫理―「よい死」をめぐる言説を

「生命倫理学」への疑問

1、自分の人生を棚に上げた、論理的なパズル解き（哲学・倫理学系研究者）

2、現場に役立つ議論を！現場のことは現場の人間が最もよく知っている！（医療系研究者）

3、患者の権利や人権の強調（法学系研究者）

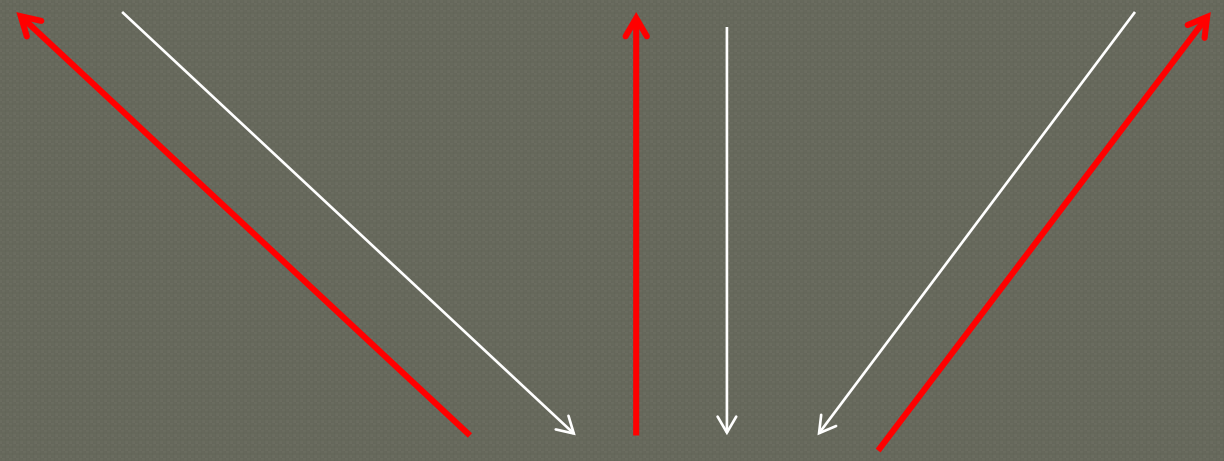
→　根本にある「いのちへの問い」の棚上げ？

宗教学・死生学

- 宗教哲学からの学問的出発
- 人が人であるということのなかに
  宗教的なものが含まれている
- 人が人である／人でなし
  →むしろ「人は」もう一度
  自覚的に「人になる」必要がある
- なんらかの「人を超えた存在」
  「人がそれによって生かされている
  いのち」への気づきを介して
  ＝スピリチュアリティ

いのちを問う／いのちから問う

宗教― 生命倫理（学）―医療



いのち

人間の生の四つの次元

人が「人として」生きること

life = 「生命」「生活」「人生」「いのち」

日本語では日常語のなかである程度

区別され、使い分けられている

生命力／生活力　　生命科学／生活科学

生命の危機／生活の危機／人生の危機

限りある生命／限りなきいのち

※「いのちの危機」というものがあると

すれば？

医療の危機、宗教の危機、生命倫理の危機

倫理とはなにか？

- 社会的なルール？
  個人の内面的呼び声、良心？
- 人が「人である」「人であり続けること」の本質に関わるもの

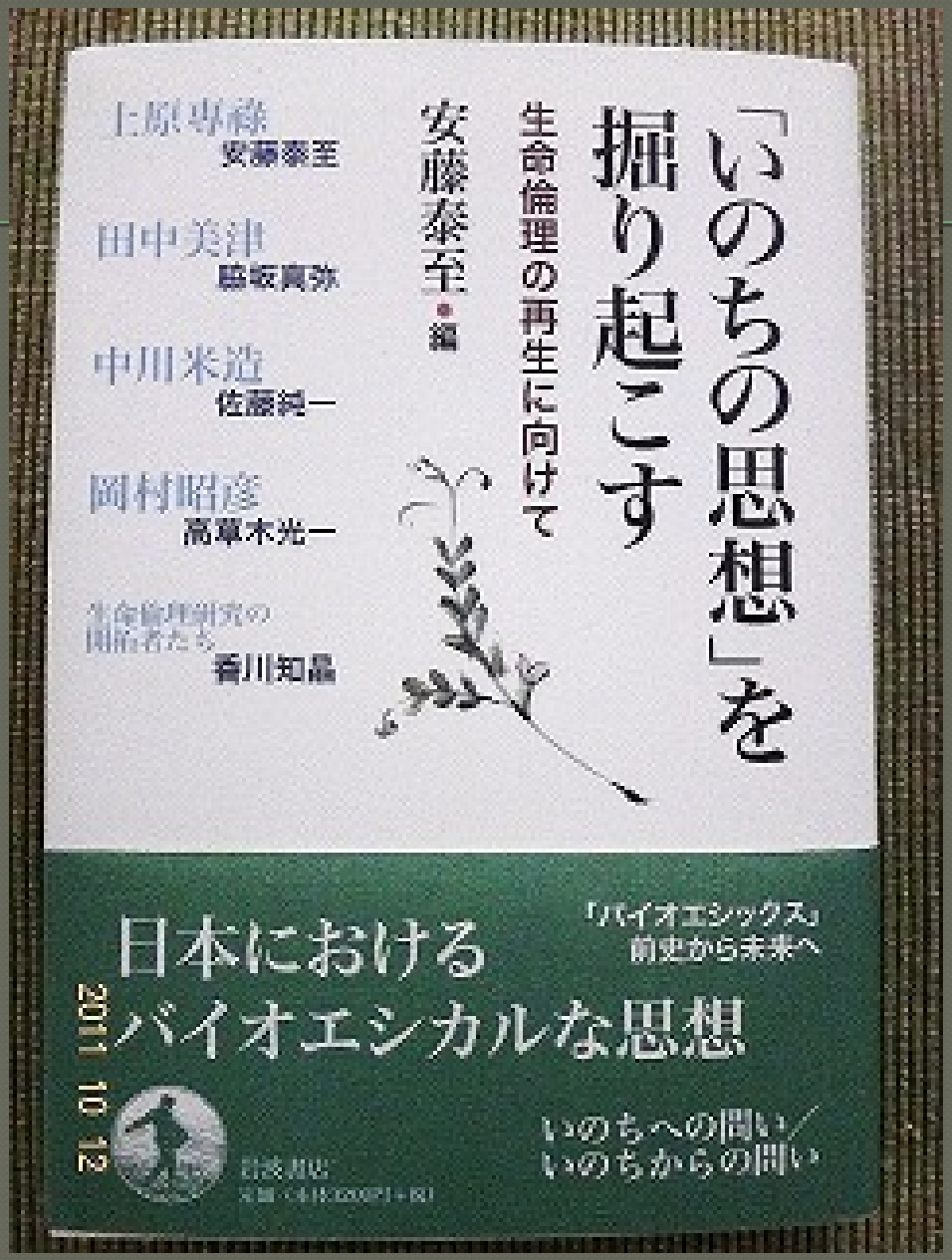
「人を人として遇する」
「人を人として見る」　ことに根本

医学・医療のなかには・・・

本質的に「人を人として見ない」まなざし
が含まれているということ

- 「患者」という言葉
- 「徘徊」？
- 「意識がない」？
- 「脳死」？

超昏睡患者　脳死患者　脳死の人　脳死者　脳死体


「いのちの思想」を掘り起こす
生命倫理の再生に向けて
安藤泰至 編
上原專祿
安藤泰至
田中美津
脇坂真弥
中川米造
佐藤純一
岡村昭彦
高草木光一
生命倫理研究の開拓者たち
香川知晶
「バイオエシックス」前史から未来へ
日本における
バイオエシカルな思想
2011 10 12
いのちへの問い／いのちからの問い
岩波書店

「いのちから」医療と宗教を問う

「いまの日本人は、一方ではお医者さまに殺されて、他方では坊さんに、簡単に浄土や極楽に持っていかれている」
「医者と坊主のなれ合いだ」
（上原専祿　『死者・生者』　1974年）

医療や宗教は、私たちが人として生きる（いのちを生き切れる）ように、支えることができているのか？

生命の操作 危うさを考える

「欲望手放しで肯定 大事なもの失う」

激動する 世界と宗教

鳥取大医学部・安藤准教授に聞く

いまから40年前、世界初の体外受精児が生まれた。「生命」に関わる様々な技術はその後、急速に発達し、遺伝子を自在に改変できるまでになりつつある。私たちはどこへ向かっているのか。そこに宗教はどう関わるのか。鳥取大学医学部の安藤泰至准教授（宗教学）に聞いた。

細胞の核には「生命の設計図」であるゲノム（全遺伝情報）が入っている。それを狙った通りに改変する「ゲノム編集」。2012年に米国で画期的な手法が報告されて以来、衝撃は世界に広がっている。

この技術は適当なキットさえ手に入れば高校生でも編集作業ができるほど簡単で、画期的な早さで成果が期待できます。動物ではすでに、筋肉量をものすごく増やした豚や牛が誕生しています。筋肉の成長を抑える物質をつかさどる遺伝子があり、それを壊すのです。人間の欲望を満たすためにこうした生物を意図的につくることに、多くの人は漠然と「気持ち悪さ」を感じるのではないでしょうか。

あんどう・やすのり　1951年生まれ。専門は宗教学、生命倫理、死生学。編著書『「いのちの思想」を掘り起こす』など

1978年に世界初の体外受精児が誕生、80年代には臓器移植が本格化した。新たな「生命操作」の技術が出るたびに、生命倫理上の問題が議論されてきた。「ゲノム編集」の時代になり、米国ではすでに、ヒトの受精卵を使って心臓病の原因遺伝子を修復する実験が始まっている。

「遺伝子を改変しなければ治らない病気の人を見捨てるのか」と言われれば、反対しにくいです。しかし、いったんヒトのゲノム編集を認めると、いずれは正常な能力をより高めるための技術としても用いられることになるでしょう。病気の治療と能力の強化をはっきりと線引きすることは難しいからです。

より健康でありたい、知能や身体能力をより高めたい。私たちはそうした欲望をあおられています。それを三放しで肯定していくと、何か大事なものが失われていくのではないでしょうか。悪い通りにはならなかったり、予期せぬことが起きたりした時に、それを受け止めることで私たちは成長するし、人生も新たに開閉していく。それが生きることの妙味なのでは。

科学の進歩を前に、立ち止まって考えることを促してきた一つは宗教だったが、現状はどうなのか。

世界初の体外受精児が生まれた時、キリスト教の保守派などは「人間は神を演じてはならない」と反対しました。ところが、米国には「人間は神を演じるべきだ」というキリスト教神学者もいます。「神の恩寵」である人間は「遺伝子改変などによってもっと優れた存在になり、神に近づくべきだ」と主張するのです。伝統的な教義のどこに焦点を当てるかで、まったく違った主張が出てくるわけです。

ゲノム編集の規制は各国に任されている。日本ではようやく昨年、日本学術会議の検討委員会が生殖医療への臨床応用について、「最低限、国の指針により、当面は禁止するべきである」との提言を出した。では宗教が果たすべき役割とは何か。

日本では一般的に、教団としての宗教に対するイメージはよくありません。「教義に照らして、この技術は……」と語っても、人々の共感は呼ばない。そもそも科学や医療の現実について、ちゃんとした知識のある宗教者はほとんどいないでしょう。生命操作という問題に向き合ってこなかったと言わざるを得ません。

共感を得ることができるとしたら、教義に基づく立場の表明ではなく、個々の宗教者の日々の営みにある。つまり、いのちをめぐる問題を抱えた当事者の悲しみを一緒に受け止めてくれる存在としての活動でしょう。科学は生命を「合理的に割り切れるもの」と見ますね。それに対して宗教は、「割り切れないもの」をそのままに受け止めて一緒に悲しみ、支える働きをしてきました。そこに宗教の役割がある。

宗教は別に科学と対立するのではありません。宗教は、科学的なものの見方を相対化しつつ、私たちの生身の人生と科学技術との関係を等身大で見つめるような視座を提示していく必要がある。宗教が生命倫理の議論に貢献できる点はそこにあると思います。

倫理的な許容範囲 宗教界は

国内外の宗教界は「生命操作」について具体的にはどう反応しているのか。

最も敏感な宗教の一つはカトリック教会だ。ローマ法王庁は、ゲノム編集の研究が本格化する前の08年に「人格の尊厳」という指針を発表。そのなかで遺伝子治療のうち体細胞に関しては、治療目的であり一般的な道徳・原則を守るならば許されるとしている。

だが、生殖細胞（精子と卵子）の遺伝子治療は体細胞と区別する。生殖細胞の改変された遺伝子は子孫に伝わる可能性があると懸念する。「生じるかもしれない欠陥を子孫に広めるような行為を行うことは倫理的に許容できません」と述べている。

日本の伝統仏教の主要な宗派は付属の研究所を持っており、不妊に関する生殖補助医療や臓器移植などの問題について検討してきた。しかし新しい技術が次々と登場することに追いつけず、事実上、ゲノム編集などは手つかずでいる。

（鐘村健太郎）

◇

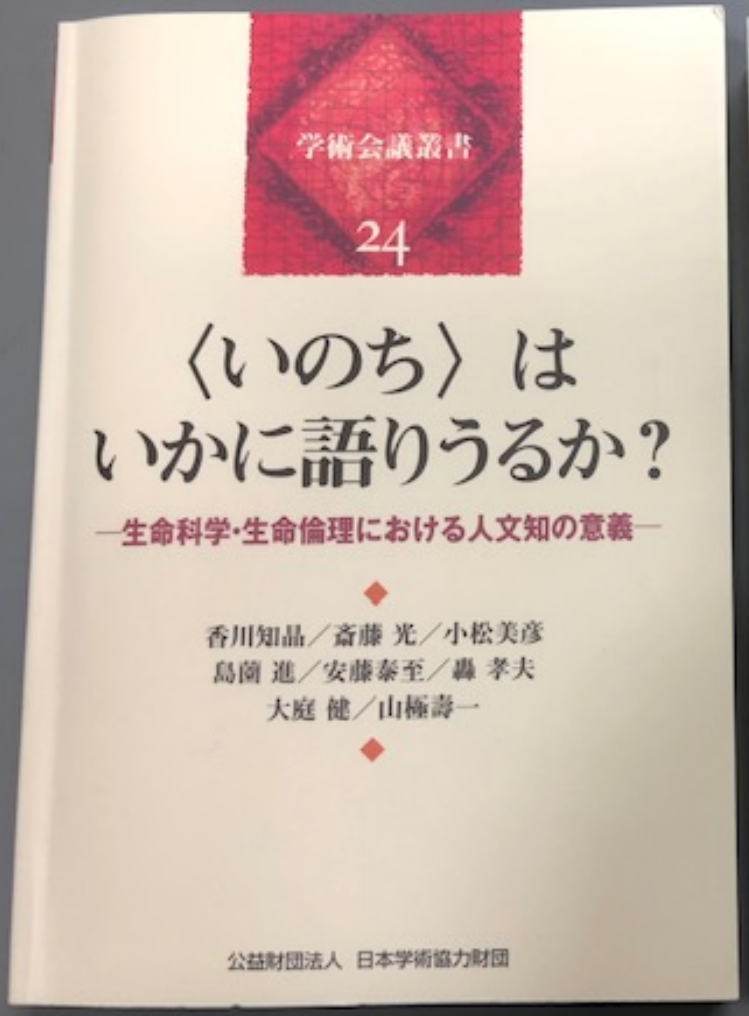
連続シンポジウム「激動する世界と宗教――私たちの現在地」（角川文化振興財団主催、朝日新聞社・KADOKAWA共催）最終回の第3回が21日、東京で開かれる。安藤氏の講演も。

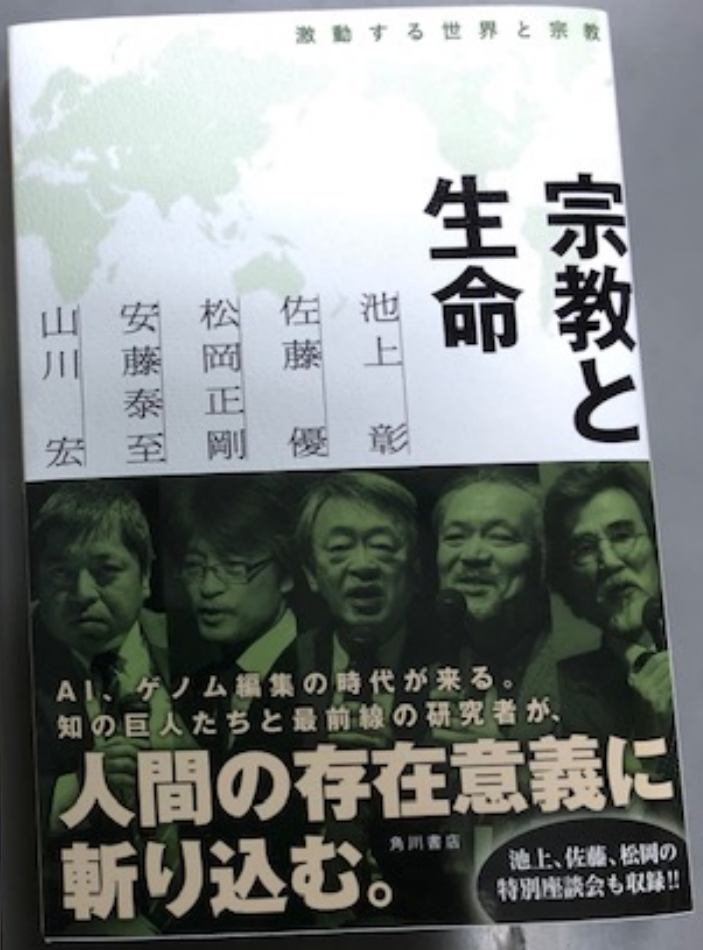
掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

「生命操作」を切り口にして考えてみる

●拙論「生命操作システムのなかの『いのち』
—生の終わりをめぐる生命倫理問題を中心に—」
（『〈いのち〉はいかに語りうるか？』
日本学術会議叢書２４、２０１８．所収）

●角川財団・朝日新聞社共催シンポジウム（2018.3）
「激動する世界と宗教　第３回　　宗教と生命」
安藤講演「生命操作時代における『いのち』
～宗教からいのちを問う、いのちから宗教を問う～」
同シンポジウムをもとに、角川から書籍化
池上彰・佐藤優・松岡正剛・安藤泰至・山川宏
『宗教と生命』


学術会議叢書
24
〈いのち〉は
いかに語りうるか？
—生命科学・生命倫理における人文知の意義—
香川知晶／斎藤 光／小松美彦
島薗 進／安藤泰至／轟 孝夫
大庭 健／山極壽一
公益財団法人 日本学術協力財団


激動する世界と宗教
宗教と生命
池上 彰
佐藤 優
松岡正剛
安藤泰至
山川 宏
AI、ゲノム編集の時代が来る。
知の巨人たちと最前線の研究者が、
人間の存在意義に斬り込む。
角川書店
池上、佐藤、松岡の特別座談会も収録!!

先端医療と「人の生命の操作」

１９７８年という象徴的な年

１、**世界初の体外受精児の誕生**
→「不妊治療」として普及する
生殖補助技術

２、**ＩＶＨ（中心静脈栄養）の登場**
→胃瘻などの人工栄養補給、延命技術

３、**免疫抑制剤シクロスポリンの開発**
→１９８０年代、第２次臓器移植ブームへ

出産・誕生をめぐる生命操作

人工授精や体外受精といった生殖補助技術は
「**不妊の人々を助けるため（不妊治療）**」を
錦の御旗として推進されてきた

but ・どこまでを「治療」と呼べるのか？
・不妊以外の人々にもさまざまに利用可能
・案外低い成功率、女性への大きな負担
・「治療」の長期化、多くの「敗者」？
・「不妊の苦しみ」の多元性をとらえ損なう？
・諦める（明らめる）ことができない

誕生をめぐる生命操作と生活・人生

人の生殖　＝　**精子＋卵子＋産む女性**　？

こうした要素への分解、管理、操作によって、不妊に苦しむ人々の生活や人生そのものがそこに巻き込まれる、夫婦以外の第三者、子どもの人生も

↑

技術を使っているつもりで、技術に使われる

いのちの連続性

性行為→妊娠→出産（誕生）→子育て

その一部だけを切り取って管理・操作

→　不妊治療の「成功者」にも出産後の問題

生命操作という「システム」

見える部分と見えない部分

- 不妊治療を受ける女性の離職率の高さ
  （ごく最近になって初の調査！　このことが語るもの）
- 受精卵（胚）取り違え事件、余剰胚の研究利用　受精卵が女性の体外にあって、人工的な管理のもとに置かれているとはどういうことか？

↓

「不妊治療」という言葉は、むしろ生命操作の実態を隠すシステムの一部、特定の選択を後押しする言説システム

二つのベクトル

現代の生命操作システム＋言説システム

Ａ）死なせないベクトル（不死へのベクトル）

Ｂ）死なせるベクトル

Ａ・・・私たちの欲望をあおって推進されていく

治療 → エンハンスメント（強化）

より健康に、より長命に、より高い能力を

Ｂ・・・それが尽きたところでさっさと死なせる

（あきらめさせる）

ＡとＢは一体のもの

生死の自己決定（自分のいのちは自分のもの）

優生思想（生の質による選別）

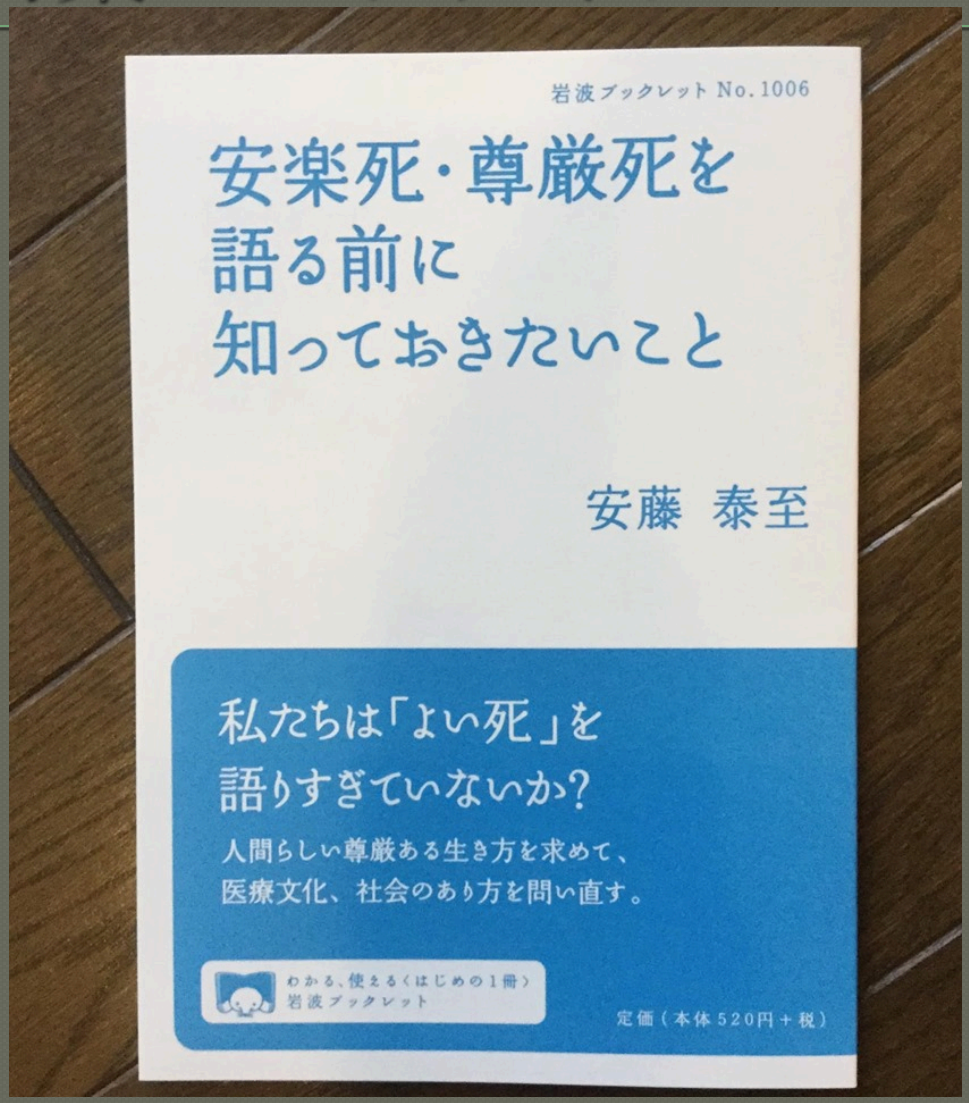
脳死臓器移植の言説システム

- 「脳死」という言葉はシステムの一部
  a)脳や身体の状態としての「脳死」
  （超昏睡・不可逆 的昏睡）
  b) （従来の三徴候死とは異なる）死としての「脳死」
- 人体の道具化・手段化を覆い隠すキャッチフレーズ
  「いのちの贈り物」　「いのちのリレー」
  ドナーとレシピエントの間の人格的関係の偽装？
  レシピエント／ドナー間の経済的格差の隠蔽？
- 「死の受容」をめぐる言説とケアシステム
  「臓器提供への同意はドナー家族の悲嘆（グリーフ）に好影響を与える」という言説、「グリーフケア」としての介入の正当化

<u>家族に死をあきらめさせる</u>　＋　<u>医療者の躊躇を減らす</u>

安楽死・尊厳死をめぐる言葉のポリティクス

安藤最新刊



宗教　と　生命操作

宗教は一般に「人の生命操作への流れにブレーキをかけるもの」として想定されている

but　そう単純ではない

- 特定の宗教や宗教的教義から、個々の生命操作技術への見解が一義的に出てくるわけではない
- 人の生命操作を積極的に礼賛するような宗教的立場も
- 特定の文化・社会における生命操作技術への態度に影響を与える要因は多数

＝文化や宗教への還元論は危険

cf.　日本における宗教的な立場からの脳死反対論

医学的な死／文化・社会的な死　という対比

宗教の役割

教義　→　生命操作技術についての一定の立場

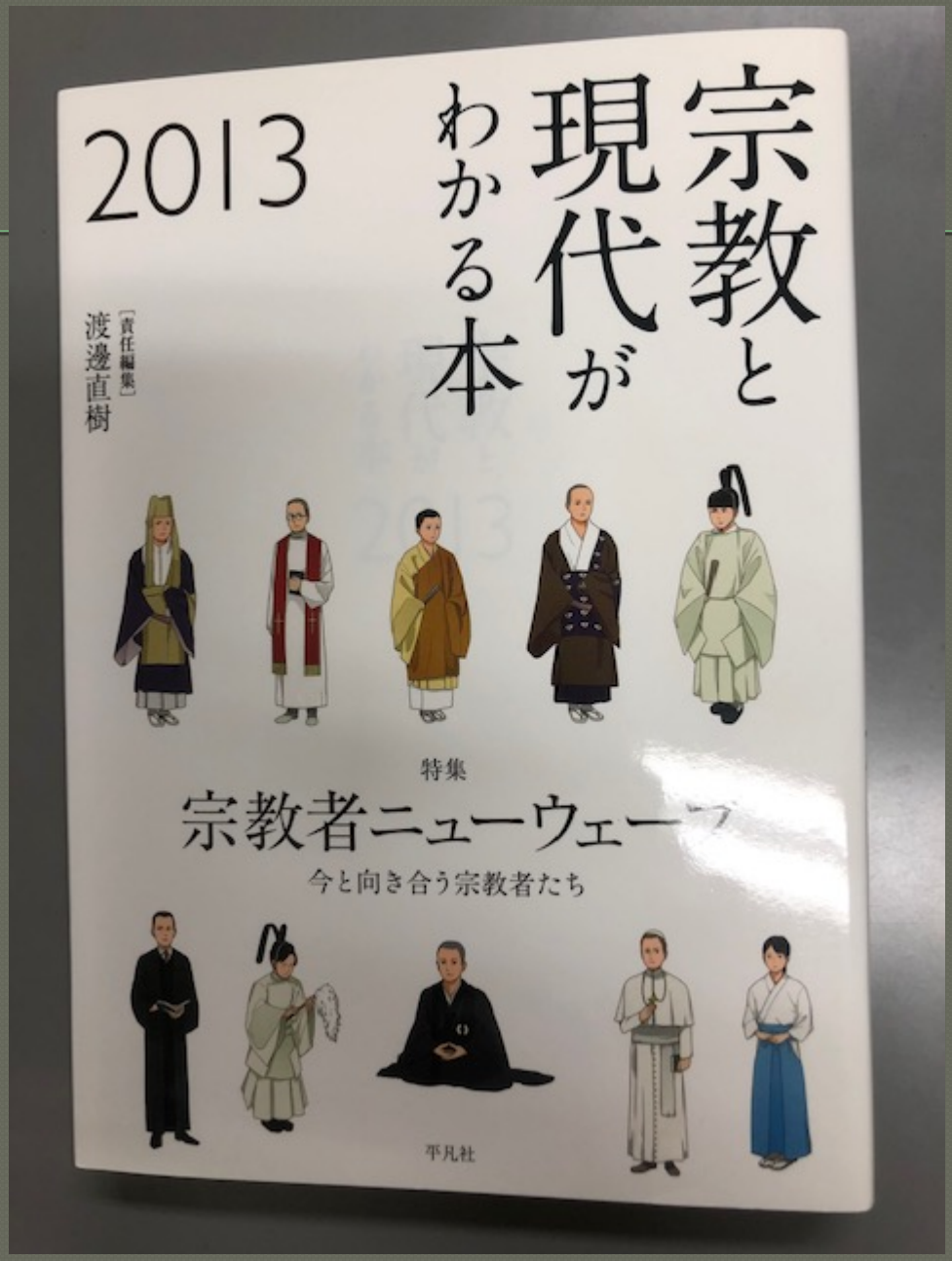
・同じ宗教・宗派でも多様な見解

・ほとんどの人々が「自分は無宗教」と見なす日本では、あまり影響力をもたない

いのちをめぐる問題を抱えた当事者の悲しみ、苦しみを一緒に受けとめる宗教者の活動

合理的に割り切る科学・科学技術　に対して別のまなざし

割り切れないものをそのままに受けとめ、支える


宗教と現代がわかる本
2013
[責任編集]
渡邊直樹
特集
宗教者ニューウェーブ
今と向き合う宗教者たち
平凡社

宗教的「いのち」言説

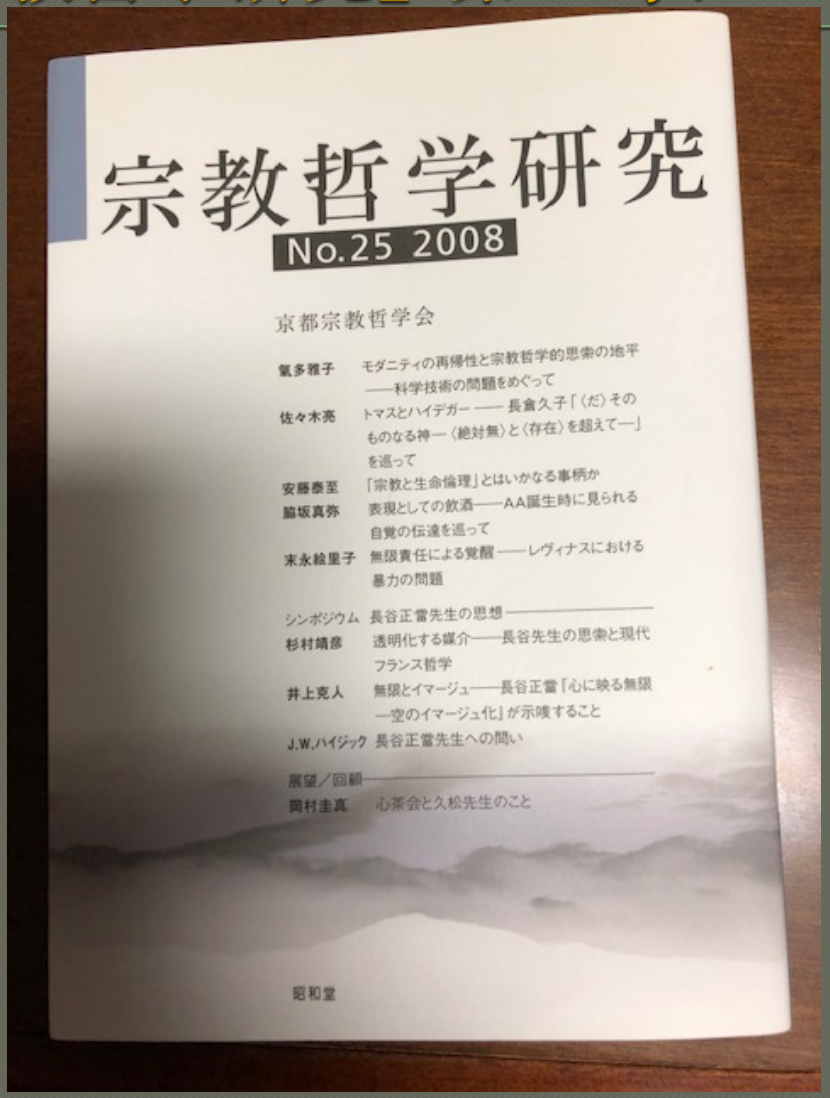
１、有限な生命／無限ないのち（神仏）
２、与えられたものとしてのいのち
３、つながりとしてのいのち（相互依存性）
（拙論「宗教的「いのち」言説の陥穽」、
『宗教と現代がわかる本　２０１３』所収）

今日の生命操作システムのなかで、
それだけでは有効な歯止めにならないどころか、医療や生命科学における生命操作の全体に無知なまま、こうした言説が説かれた場合には、むしろ生命操作システムを補完しさえする

「宗教」と「生命倫理」

「宗教」という語にも、
「生命倫理」という語にも、
それぞれ複数の意味、次元がある
ので、どういった意味での「宗教」
と、どういった意味での「生命倫理」
の関係を問題にするか、によって
さまざまな問題群が含まれることに
注意

安藤泰至「「宗教と生命倫理」とはいかなる事柄か」、『宗教哲学研究』第25号、2008所収



宗教哲学研究

No.25 2008

京都宗教哲学会

氣多雅子　モダニティの再帰性と宗教哲学的思索の地平——科学技術の問題をめぐって

佐々木亮　トマスとハイデガー —— 長倉久子「〈だ〉そのものなる神—〈絶対無〉と〈存在〉を超えて—」を巡って

安藤泰至　「宗教と生命倫理」とはいかなる事柄か

脇坂真弥　表現としての飲酒——AA誕生時に見られる自覚の伝達を巡って

末永絵里子　無限責任による覚醒——レヴィナスにおける暴力の問題

シンポジウム　長谷正當先生の思想

杉村靖彦　透明化する媒介——長谷先生の思索と現代フランス哲学

井上克人　無限とイマージュ——長谷正當『心に映る無限—空のイマージュ化』が示唆すること

J.W.ハイジック　長谷正當先生への問い

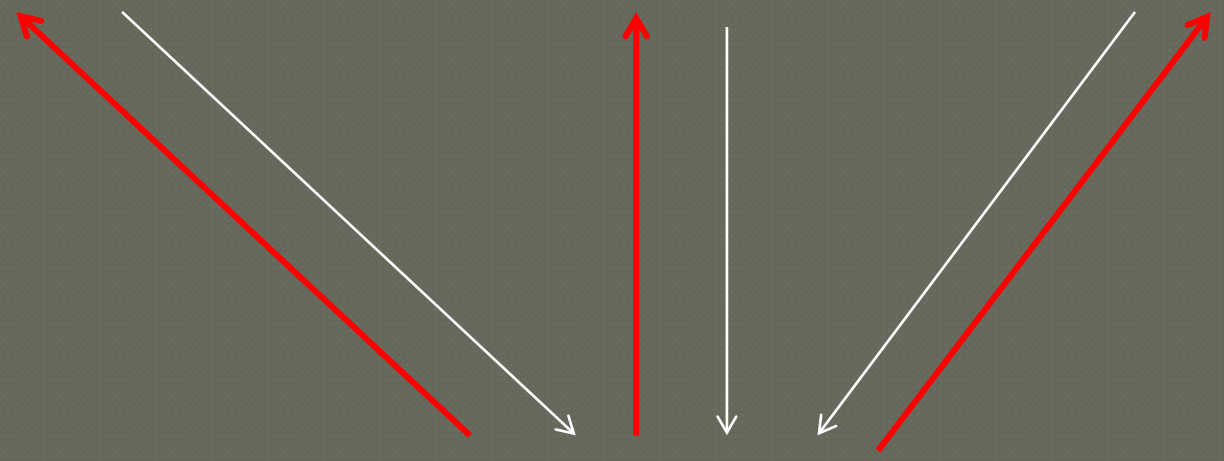
展望／回顧

岡村圭真　心茶会と久松先生のこと

昭和堂

いのちを問う／いのちから問う

宗教― 生命倫理（学）―医療



いのち

ご静聴
ありがとうございました

鳥取大学イメージキャラクター
とりりん